

という。江戸の人。初め朱子学を学び、後、古文辞学を唱道。門下から大宰春台・服部南郭等を出した。著「弁道」「藝園随筆」「論語徴」「訳文筌蹄」「政談」「太平策」「南留別志〔なるべし〕」「弁名」など。享保13年没、年62〔また63〕。

注(2) 大正14年7月から4回「宮城県人」に連載。単行本として昭和11年刀江書院から出版。また、講談社版「真山青果全集」第15巻（昭和16）、「真山青果全集（新版）」第17巻（昭和50～53）に収録してある。この中で青果は次のように述べている。『方言俗語なりとしてゐる言葉の多くは、奈良朝万葉時代の古語であったり、戦国鎌倉時代の東国語であったり、或は室町時代の女房言葉、慶長宝永の京坂語であったりして、いずれも一度は日本の政治首脳部に普通語として行はれた言語であります。……実は一部の仙台方言考なる書を作り上げるために、三四年以来は雑書涉獵の序に仙台方言の典拠出所を随時に書き集めて、ほぼ七百語近くの記載ができました。その七百語は完全に、過去の日本語が方言とされて仙台地方に保存されていると云ふ証拠になるものです』。

青果の業績の上に語彙研究を一步進めたのは頼原退蔵である。「江戸時代語の研究」で近世語の解釈の方法の一として方言研究との提携を言っているように、この方面の開拓者としての青果の意義は決して軽くない。

注(3) 近松門左衛門の作品。近松は江戸中期の浄瑠璃・歌舞伎脚本作者。本名杉森信盛。平安堂・巢林子〔そうりんし〕などと号した。越前の人。歌舞伎では坂田藤十郎と、浄瑠璃では竹本義太夫と提携した。竹本座の座付作者でもあった。代表作「国姓爺合戦」〔こくせんやかっせん〕「曾根崎心中」「心中天網島」などあり、狂言本20数編、浄瑠璃百数十曲を作り、義理人情の葛藤を題材に人の心の美しさを描いた。享保9年〔1724〕没、72才。

資料 仙台方言考（真山青果）

伊達騒動実録（大槻文彦）

仙台の方言（土井八枝）

言語民俗（藤原 勉、「宮城県史」第20巻の内）

自伝的仙台弁（石川鈴子）

## 62. こけしの語源と素材

問 こけしの語源は何か、またこけしの素材にどのような木が使われるか。

答 まず、「こけし」という名称が、一般的統一的名称となったのは昭和以降のことで、それまでは

各地方毎に実にさまざまな方言で次のように呼ばれていました。

こげすんぼこ（仙台）  
こげす・こけし・こうけし・坊主（鳴子）  
こけす（酒田・上山・遠刈田）  
こげす（肘折・青根・遠刈田）  
こげすっこ（秋田県雄勝郡）  
こけすっこ（湯田）  
こげし（遠刈田・一ノ関・花巻・大湯）  
はげし（花巻）  
きぼこ・おっとこ（福島県伊達地方）  
きぼこ・おほこ・にんぎょ（鎌先・弥治郎）  
きんぼこ・きぼこ・きおほこ・きぼっこ（仙台）  
んぼっこ・にんぎょう（山形）  
きじほぼ・きじほこ（秋田県本荘）  
ぼっこ（秋田県雄勝郡）  
ながおほこ（温湯）  
いんつこおほこ（温湯）  
きおほこ（遠刈田）  
きぼこ（青根）  
おほこ（一ノ関）  
ほんぼ・きにんぎょ（温湯）  
こけしほんぼ（湯沢・大館）  
こげほほこ・こけしほぼ（小安）  
こけしぼっこ（鉛）  
こげほこ（秋田県雄勝郡）  
きでこ（福島・飯坂）  
きでこさま（会津地方）  
でころこ（原町）  
でく・かまさきにんぎょ（小野川）  
でくのぼう（山形・肘折）  
でくの坊（上の山・蔵王温泉）  
でこ（土湯）  
きなきなずんぞこ・きなきなぼっこ（一ノ関）

くなくなこげす・きくきく坊・きなきな坊（岩手県胆沢郡）

きなきな坊（岩手県上閉伊郡）

きくら・きくらぼっこ（鉛）

きっからぼっこ（花巻）

これらが統一名称となったのは、こけしに関する出版物が「こけし」の名でこの木製人形を紹介したことに起因するのだといわれます。明治24年〔1891〕の「うなゐの友」初編（清水晴風）で『コケシバウコ』と、また同35年〔1902〕の同書第2編では『こけし這子』と称したが、その後、わが国最初のこけし専門書として天江富弥氏の「こけし這子の話」が昭和3年に出版されるに至って、名称統一への方向が示されたといえるようです。後年「這子」を省略して単に「こけし」と呼ぶようになり、本来子供の玩具の世界から取上げられて、大人の広い収集ブームに乗せられるにつれて、次第に統一名称として定着したものです。そしてこの「こけし」という統一名を書きあらわす場合も、平仮名または片仮名によることになっています。昭和14年8月、鳴子温泉で開催された全国こけし大会でも、仮名書きによるべきだという決議がなされています。こけしというものの素朴な発生からしてもそれは当然のことで、こけしという発音に無理に漢字を当てて、木形子・木芥子・小芥子・木削子・木華子・御芥子・御形子・小筥子・子戯子などとしている例は、まことに気障で適切なものではありません。

さて、この「こけし」の名称は古くからあったもののようです。「文久二年〔1862〕鬼首村取締長蔵文書」（太陽コレクション「土農士商」江戸明治Ⅲの内）に『村々出産之木地人形こふけし杯と申候様之品御国産に候共無益之品ニ相ミへ申候間右売買一切被相留候様被成下度奉存候』などとあります。しかしながら、その語源については定説がなく、中には上記のように漢字を当てた字面の外形から語源に遡ろうとする牽強の説が多く、きめ手といえるようなものはないといわれています。それらの諸説のいくつかを挙げますと、

1. 「こけし風土記」（西川峯吉）『こけしは徳川時代に流行したオケシまたはケン坊主といわれた小児風俗（頭髪をそり頂に丸く毛を残しておく童型）の反影であって、オケシがコケシに転化したものである。すなわちオケシのオは親愛の接頭語で、時として無意味の接頭語として他音に変化する。Oの母音に木を意味する子音が結合し、KOに転化したと見るべきで「木で作ったオケシ」を意味している』
2. こけしは「木筥子」で、小さい筥〔かご〕に入れられた赤ん坊。
3. こけしは「木形子」で、木で作った人形。
4. こけしは「こげほこ」で、こげは木片、ほこは人形、木で作った人形。
5. こけしは「こげし」で、こは木、げは削、しは子で、木を削って作った子ども「木削子」
6. こけしは「こけす」で、こけしのこは木の葉、木の実、木羽を このは、このみ、こぼというように木のことであり、けは削るの下の部分を省略したものである。すは、ほととぎす、うぐいす、

きぎす、からす、きりぎりす、おす、めすなどというのと同じ美称の接尾語である。

7. こけしは「御芥子」の訛〔なまり〕で芥子坊主の意味。
8. こけしは極小のものの称呼で、木で作った小さい人形の意味。こ(木)けし(芥子)。
9. けしは極小を意味するが、こは(木)でなく「小さい」を意味する接頭語で、こ(小)けし(芥子)である。

次に、こけしの素材となる木は、東北地方の湿地帯や山腹に自生する比較的材質の軟かい木で、木炭などの原材に適さないものが選ばれます。昔は利用価値のないものとして顧みられなかった廃物同然の木を利用して、山村の女の子の玩具、人形としてのこけしを作り、温泉場の湯治客の土産として細々と売り出したものです。こけしに作られた原木は、やまつつじ(だけつつじ)・おおはだ(びやべら)・えごのき(じしゃのき)・おおばじしゃ(ひとつば)・うりはたかえで(あおか)・みずき(だんごのき)・いたやかえで(いたや)〔( )内は宮城県地方の呼び名〕などが主で、その外に、まんさく・つばき・桑の木なども使われます。ただし最近はこれらの原木も、とみに入手難となり、こけし工人の憂慮の種になっています。

資料 こけし事典(土橋慶三・西田峯吉)

蔵王東麓の木地業とこけし(佐藤友晴)

### 63. 刀工国包の名の読み

問 「奥羽の刀剣と刀匠の研究」(安部定橋)や、その他刀剣に関する本の中で、仙台の刀工国包の名に「くにかね」と振り仮名を付けているのがありますが、それでよいのでしょうか。

答 国包の正しい呼び方は「<sup>××××</sup>くにかね」ではなく「<sup>・・・・</sup>くにかん」です。その根拠となるものに、総振り仮名付きの「仁沢の偈」〔<sup>(1)</sup>にんたくのげ〕があります。その全文は次の通りで、国包の子孫である仙台の本郷家に伝存されているものです。

『仁沢(にんたく)』

陸奥仙台之居住山城大掾藤原国包(くにかん)者坂東最第一之刀工也利其鋒鋭其刃如干将似莫耶其名上達天聰下伝諸侯天下無人之間然矣一日就余求法名仍諱之云用恵(ようけい)字之云仁沢乃書二大字繫一偈

看々儒童菩薩心到今及草木叢林

寛永十五歳在戊寅仲秋如意珠日前花園寓松島把不住軒主雲居叟希膺(うんこう、そう、きょう)』